

911.3
シ

名馬
十

五ノ二



白鳥集自序



ありし鼻祖者蓋其翁の津子孫に傳はる
 一書を案するに強乃く考を一一つ言を
 半の法好のハヤ名不の自り三詠の歌
 案案を多録と皆と結細道乃は以てり
 並ひのあひの母かとの崎の一筆を以てり
 考少無もり一西脚ひらん彼多葉子
 案を撰りしは皆其翁の梅を以てり

傳のうしき千載集の足跡を歩む志あり
都の山をめぐりて一歩の歩みも
しきらるるに今もいかに事の経緯も
遠く古の跡を歩み及んば
高夜の花を眺むるも
心ゆくもさるるも
世の隆光も
一筆の筆を運ぶに
此今前密書に
其の細小

らるる母墳墓も築き
かりき築き
産んを既し
夢を
下り
入
世
父母

万石一斗を以て計る所の也
 奈良茶三石の反哺と名なす
 二石集の石名は二石の代を
 只六石を以て計る所の也
 解石の石名を以て計る所の也
 き一斗を以て計る所の也
 二石集の石名を以て計る所の也
 夕子集の石名を以て計る所の也

省寛曆十一年己未十月十日

錦溪舎琴路誌



凡例

一 總巻頭 遊初上人中興句

蓬二村の三千化小敷い幸に近き以五斗
二世結成りし結巡回の集の待るる幸に
木の撰集結成りし六の如

一 かの崎如歌仙 月の座より古菊の
愛句をとりしむる幸に結成りし六の如
能くしむる幸を擧ぐ一巻の程

採りしむる幸に結成りし六の如
自ら集りしむる幸に結成りし六の如
附句に採りしむる幸に結成りし六の如
罷も道迷いしむる

一 字子の歌仙 採りしむる幸に結成りし六の如
美乃座の向の櫻もすしむる幸に結成りし六の如
梅もすしむる幸に結成りし六の如
採りしむる幸に結成りし六の如

一 越國通志の書句一入一唱の名案うて
 う四季の都をいふに越國の國其好の
 類を聚むるに在るの古くは越國の
 類をいふ

已上



白
 石
 沈
 底

かひ、奇し

福はり多

遊新上人一海

新畑もね者小者

かひ

か福崎

ふから奇形個

之四切

考の菓くはちねく母又く似きくも
 心さくお記るねくく女又乃西不さけい
 樹中らわらるきく一木路くおね遊人言
 又く曉を報する能なりと志く
 鳥羽まをく馬車おねく入新くや
 かつまをく入家者馬知く物始あはれき
 ねく舞あをく近き比言の敷賀くか

公の書に「事多難の事多難の中」
 今何れも多難の事多難に造物者も遠行の道に
 此の道は多難の事多難の道に
 此の道は多難の事多難の道に
 此の道は多難の事多難の道に
 此の道は多難の事多難の道に
 此の道は多難の事多難の道に

月夜ノ葉乃ほふれく
 心か



歌仙

仲秋望夜数知りて由る雨降り
 月夜ノ葉乃ほふれく

芭蕉翁

月ノつゞきと沈みたる乃底

向ハハありしも雪小能吟 琴吟

葎桂ノ木すほの葎刈はるる 葎

之又道ノ葎由さふ能 琴何

音ノ来ノ病ノ仕多能能能能 六詩

山吹はるる葎由さふ能 桂葉

ふんせうたけのきりぎりす

曳尾

舞臺の舞りてきめは

楚囚

舞うるにまじりて

諸夫

名にひらけりて

芥舟

名月や水國の如きは

紫苑の花乃木初

其雪

来幸の文をよみ

路

明香亭の如尼乃

江

河をたぬる雪は

河

安吉の舞ハ

詩

象意の如ハ

葉

かきりも

尾

喜の如き

田

復た

末

出ま

舟

表

徳

かゝるにみよひの暮の海にさす

いろはののまゝの海にさす

八雲の川津代とてはなれり秋

物まゝの時とてはなれり秋

秋の川津代とてはなれり秋

秋の川津代とてはなれり秋

今七遊りし砂とてはなれり秋

今七遊りし砂とてはなれり秋

柿み入る市に店先おし言ふ

柿み入る市に店先おし言ふ

重なる言ふ言ふ如く物

重なる言ふ言ふ如く物

難波津とてはなれり秋

難波津とてはなれり秋

細石乃記ありはなれり秋

細石乃記ありはなれり秋

海

河

津

秋

因

尾

夫

夫

夫

夫

夫

鐘塚供養辭

柙は鐘を高砂の曉もつらに之井の夕ふ
あはれをくはよの中山の富貴を影ふに
つらねはゆへに道來の女に禁あはれ
うも及に是吾たあ友つらに下 遊
せし遊のうの塚もくはまはあは
元縁二やまの松を甚の翁製乃細を
ふよりくまは津のまを福をせ

あまのしなすの祖又まの者ももの
霧旅の旁をいりあはれし
激志をいふまのいさだの聖心乃
あつてあはれの候をいさんとみは
舟の穂先はあまの素内や
まのあはれをいふまのあはれ
小貝小魚もいふまのあはれ
鐘の村はあまのいふまのあはれ

家増は中ふかひの時の薩州海に沈むる
事しむにその事乃日暮きし相
傳仰におほつぬ事函情のよまひに
今もいふに付着あつていふに
塚面を給へし餘をさる世子傳へん
ふりぬ事な志にたりぬ事な
去禱もいふに若き家通志乃決
事しむにその事乃鏡の事なり
五月

鏡乃欠る事なりは善く一向事
今も薩州の一件全く傳へん
俗事如法ある事なり千部
欠る事なりは善く客ぬか
會成を定ぬ事なり百部
事しむにその事乃鏡の事
事しむにその事乃鏡の事
事しむにその事乃鏡の事

釋蓮とよかけのま華擺揮意り幸ふか
其ふふのくくくくくくくくくくく

十飛雙

大翔歌

かひ塚の首葉かふと

着さひ

十百韻并一座松鳥の句作り号

漫興

蕉雨

日小あふ流行如りり下あきる

秋とあふ雨と葉と笑人夜 琴路

近きと御妻子 雜の解懐と 大翔

江戸入る 事此ハ先男なり 二笠

標子、たゞ多ぬり、橋の月 文姿

警古の笛、ま川、吹 琴上

穿くはまはりの體か、利 左梅

歩引ハ赤い石の池の湯苦湯
 湯濯の禮と云ふ事一 赤く水は
 う起ふは赤くぬくち工店之
 高ひと野郎の時乃日意先
 投くも破まぬ古谷は田楽
 海よりと山を抱へくふ乃自
 周廟と下知み捨ぬ信云
 笑うる菊も菩薩の年一房二
 柳 桑 冬 雨 後 翹 登 安

進ハ雛子の白と赤は影
 赤法も長く赤く赤く赤く出
 夕日の紅を赤く赤く赤く
 赤幸と風まへ入ぬ赤く恒
 ち赤く赤く赤く赤く赤く

工 梅 楊 角 草

名録

春部

夢中下流風時をいほきり

琴路

梅の葉や森物語りけし恒陣

六話

信起く看經句ふ堅梅の雪

大翅

掃くやの筆進来の小枝か

敦賀産松前

巴角

物さぬく嘆か戸の明筆如古

桂葉

うぐいさ中息吹けく山の色

盛江

梅の葉や深はかきこゝ定の雨

冬梨

占ひの編笠をきく心めはる

曳尾

暮色の飛うさほく月几中

西都

信鳥千葉ふ出来たりけし繁像

夏彦

山際か嵐の交はるはくはく

芥舟

糸と粉も鳥乃すの月夕平陰

東溪

美鮎やまの川の漱乃中さき

西千

非はるやとさくさきぬく様之能

楚因

うら飛まはるを流ふや歌おぬ

如水

聖子遊心くきく福く喜氣ぬ

琴河

老牛... 橋... 里楊

... 起... 風子

... 干... 考和

... 出... 儲丈

... 部... 六柯

... 年... 三

... 山... 橋

... 抄... 考芬

少年

... 山... 兔耳

... 金... 其雪

... 中... 林交

... 交... 左梅

... 虎... 文姿

... 梅... 二笠

夏の部

... 木... 蓋江

洗羅の石を命甲 夕す美 冬梨

葦の葉を以てし 石の縁を 曳尾

川を以てし 石の縁を 糞因

石を以てし 石の縁を 芥舟

夕を以てし 石の縁を 燕西

言野山子詩

玉川 石の縁を 蚕と何心 琴上

月待り 石の縁を 出り 桂葉

石の縁を以てし 石の縁を 六詩

道少人の佛 石の縁を 六詩

渡音や 石の縁を 石の縁を

雲 石の縁を 石の縁を

種 石の縁を 石の縁を

布引の幅を 石の縁を 石の縁を

うらなひの 石の縁を 石の縁を

雲 石の縁を 石の縁を

秋乃部

意結や嵐のつらきもさしはれ

大畑

はまきこ山を廻る月ふら月

友冬

名月や鳥無寐くまねのうへ

平河

名とや安きやうを 嵐乃廉

善江

神はけ月をたふす木の陰

左柳

草花子あつぬく再やまのくさ

王楊

藤の中を夢ほと寝母の踊うか

巴角

半粒屋のつらきつらき笑のこ

六詩

名月やゆりかゝる水多虫の夜

桂葉

子丁のせ話か 散るる 栗山子家

東溪

魚舟八万粒結店者かまゝ時

文海

村宵や先之能のうへいせつ

曳尾

咲ハ又ちを 待たぬ 著書の家

蕉雨

酒花と露か 持さず 白くはむ

雅田

草花のうらみいふか 鹿の春

桂嫁

半まうり目一うりやう花野分
 雨柳
 糸糸や星も空百しし二つ三
 流史
 地やうも山を枕今ふり星
 乙登
 近天と葺りも道多木権う家
 比川
 武彦聖能をまうるやう落分
 冬梨
 ふさくや白ひも昭穂七つを時
 花森
 風流のつさ神志うりう初能秋
 琴工
 近古と才のとつやや能能るわ
 芥舟

菅原の賀

神唐や難波も伊勢も目一
 時
 琴法
 其書
 其書と忍ひおねとえきぬこら

我あう一能譜のつまふんうう業を東に誰か
 下に様かこ生無とハ号一侍うぬ志ハハハ
 比の少逸めを能を極く是を中子能をり
 かあるの靈妙あを少抄のさひ一うも思ひや
 う物う今もこ生志こりをもぬんう葺雨
 改名まをまう一うら能友まう一う句を乞ふ
 世に只能思の二字を中ふん一を能能能志
 中ハハハハハハ

破るう風うもぬひをうまを能か
 葺雨

冬冬都

帆棹はる置ききりし日の哉
三田村

多き路地へちりきり集むる未
蕙雨

まの雪や花のふくふくと出く置
蓋江

澄人を忍道〜ままに記す
芥舟

うゝ藤の足元をきりきり
友冬

流澤の脛へ吹まゝの落葉かな
東溪

まの雪や鶯も片柳に事な
曳尾

後まゝかゆわく出まゝみとし
琴路

まの雪やまの雪のまゝと花
冬二

神雪やまの雪のまゝと
冬河

書の細くは古書のはりし〜を感のまゝは電を
かきしめ横紙はひらききりなり〜
書の裏やちりし〜書〜書〜書〜
蔵書と古書はゆるゆる〜書〜書〜書〜
紙の美をよきとゆるゆる〜書〜書〜書〜
おもしろ〜書〜書〜書〜
御せん〜書〜

細道のゆるゆる〜のまゝに
桂葉

此地おけらる先人の句を愛子抄

山置あつたらぬ若海一唐の書 東忍

ゆり會子生海流の別枝をきまふ 東吾

夕鳥紅茶水色佳し 木質宿 芭舟

ひらくの袖乃存茶戸以丘尼海流 東宇

朔日結さやまき一袖とれ 紀白

たつ雲やいゆりと振る竿初瓶 之毒

か昇や雜乃中紅尻かき毒 花的

葉の花や 裾燈伊達の黄八丈 葉書

入おけらるるを照さや 桃乃花 う伸

草の繁う幾つ續くや虫の聲 女 里吉

竹ややゆき 船りき丸木橋 佳木

猫八や袖迄も梅をいづく舟連 一窓

はらへりや足踏かきたるの音 杯茶

あまのや音茶をよむ舟連 花橋

茶の袖も結さやし 糸をりき 二船

まのしるわあまのなをかへを程 一柳

花邊のけりく矢流乃花邊 梨月

まのあや 寛を様の潤子林 芙蓉

名くまの鏡の曲やほろきに 大*

米壽

くふまをく非擲の中をひびり 玉泉

新屏のり南と流く書院先 凡士

考や桃く伏身の被まをぬ 豫守

歩案の鼓戸町をちりけ 柳東

古翁の老回小

庚き名流を公よす娘あはし 之柳

秋のあや松分りの空はるに 云流

此作者の細かみたる
天原の系なり

徳國發句 四季混雜

伊勢

能くものを笑ひかへり山さねる 麥林

一筋ハ各一す 麩麩の所 兔士

あな野子母のちこや雪如岸 幾曉

志の秋や井筒乃る子物如音 入楚

山古く猿も雪歯むはりりか 浮石

あふ入や何所の露まはれおろす 虚舟

津さるや海一まへひ津へ来り 幾幽

秋ふつや暖山家へも返はれぬく 幾々

名月やあはれ人乃鳥の行と 己標

けいせいの源入喜り雪見の音 桃李

吾も赫と如髪をうんひ出る汝干ひ 何彦

草と木の心抄りぬ小喜か如 徑路

夕身し夢如自由も系乃耐 杜菱

春の日は一抔涼り十月未だ月
乙平

茶の盆子先らふもや秋時雨
長井

波引く磯の岩子もやうの風
岸山

秋は古くもやう也性かや
大睡

見よとて又も交々落葉の
封卜

酔花多き樽を直かり居る花
舎菜

堀の
寺やかたはる
寺退

うなまを乃甲のおとまや春の雪
見風

加賀

如田寺子詣

分 下 たる と 朱 けり 秋 の 末

暮柳

松 風 無 子 の けり 減 り けり けり

如木

名 月 や 牛 も 一 お 占 ぶ ぼ 人

寺化房

鳥 出 づ 花 の 依 まる 柳 の 家

後川

ふ か け と 秋 秋 暮 守 回 岩 乃 自

庄柔

岩 亦 毛 入 る 山 中 かん 三 冬

庄良

う へ け 暮 暮 座 禪 の 暮 秋 歸 り 家

岸呂

暮 の 日 結 一 拍 泊 り 十 八 月

乙平

茶 水 念 子 先 ち ぶ ぬ や 秋 時 雨

良井

波 引 け け け 岩 子 ち ち け け

岸山

秋 足 け け け け け け け け

大隆

又 見 け け 又 占 占 交 交 暮 暮 分

寺卜

醉 光 多 悟 暮 直 け け け け け

舎采

堀 堀 け け 陸 陸 寺 寺 け け け

寺退

う へ け け 乃 甲 の お 占 占 暮 暮 暮

見風

有るすかハミ結付くさる此哉

女のう

松風結之くまをるしほ平家

白蘆

友進子生が是言出たる角力の

弁法

新のつや指すする之縁の寺

洞平

お人乃病る此をるを此は

東来

うく飛ま結彦まはつ好木重の

存睡

籠子啼く冥結明りはぬる

尼の若

猫ハやうをひすハすこ小僧

女の孫源

松結葉とのおぬちたり高るの

王知

果乃は結つる者やいと山松

臨白

猪妻下侍子まの此又を此

岩板

名目下目お置たりを此

尼の素因

七草う茶の思ふとあぬる

三四坊

茶枕をりて字は山に此を

雲水

面を此く物生るりて此を

五牙

近江

梅咲やふるみ取討の博多道

八幡 二柳

海棠の花や西船の帆るつり

者二

雲結おと水くも話あし子規

多か

舟つぢり帆をまき結やふる自

花水

日あさりのまき草を忘るくあ草か

梧枝

茶をすり枝ふちるや春乃雪

句伸

落船や木を踏登水も以てや

春友

梅の島や木をくんは川むら

玄全

かゝ水まき結葉や笠着は杖の

立若

明ぬも柳ぬくもな水起る風

休兒

七葉中芽葉やいもはまき草

再の

うみ飛江や一帯は目のみぬる

一斗

子へ遊ぐ見と結指乃樂山子

茶石

常目をと又掃くもく堅ぶか

其引

後うまるとのまき草はくさう

十里

唐泰和福山... 竹南
物年... 如流
竹南
如流
石
石
紫芝
杜松
可思

可松
竹南
如流
石
石
紫芝
杜松
可思

十六... 田房
... 枕流
... 洲
... 天

田房
枕流
洲
天

京師

天地... 宋是
... 德夢
... 羽舞

宋是
德夢
羽舞

行つまふ秋叶終風の如きなりと

左江

山ををかききく素中標筈

秀州

松走小河のまきくは落葉の家

飛良

東武

筆目の上へきく玉の物も水

嘴子

岩花輪の折くひつる時雨の

桃舟

半のふりし南島出来き冬は梅

文州

山道の道くぬるも律しうか

州也

津ききく凡中もりや夕や春

あま

鞍我

夕女ややくしるへ遊る葉のつた

一氣

帯や流る如き乃置きたる

柳儿

花の如き如き形法や木下雲

竹阿

船飯の煙へまき移すか如

雲郎

椽先うらふ如き中へ入るまき

涼袋

但馬

ちのつらう燈籠の光乃つらうの

寒秀

歩維やふとと一髪も能は花 不確
 不梅や男とありはかりを常 袴仙
 上幸の首山や花の候姑是頁 函花
 能母の女とふまふ一河車便 女鳥仙
 大船より二人柳原に書きかぬ 文狸
 文始

越前

三秋の色や海のうら赤情能 福井 韋吹

自然なる朝や花お老乃落合 一毛村
 誇りけのうへう大ほく清らう能 一の権
 的やきたあふうの花能白にか家 存中 雨錦
 然也と云はし梅の野梅心 蒼鳩
 幸の集りは嬉しさのあきや冬朝 秋相
 少や山と水の音かききおの秋 一の兮
 前出る草うたふあふと喜は雨 露若
 己の葉も一ふれよあふやつたのあ ゴイチ 柳電

喜ぬるハ奈ノあぶ奈き徳ニ非 芋七

藤のふ乃定ニちリ 新得る計 惟し

桐橋をひとの橋かき 藤系母 舎太

若録ノあふニ結必なり 沙の雪 秋云

結た心言やふと 桂も秋風し の牧

葉のたや森より 案山子も巻るに 五苗

干物も結又結案山子 柘の花 桃舎

初は喜や 望日とも 雀の吃 蛤の ぶ艾

舟曳毛 松滑の時 浪の奇 秋 万茂

経抄や 徳結正とも 空木建 夏松

水葉底と 底乃外なり 輝の夢 白史

名母の 一水も一羽 七折 手舟

慈結手も 結不 結結 結結 結結 于紅

日の柳乃 定ひ子 出さ 何 体 の 梅 至泉

少人結 常も 中書ふ 田植 秋 里雪

うら 枯く 結 結 何 結 結 結 結 嵐如

馬のしるしに帰る如盟中 樹 自

大井川

波葉

草拈や袖のしるしに 松 如 音

極川

儿芳

帰るにまじりて月小吹流や 福 光

福光

准弓

道津を越え女子も 集 寺 杜 聖 之 松

日所

周古

春の宴もはるかに けし 返り 音

峰之橋

史貝

今細平のつらき多房の情 松 如 音

真津

李史

梅咲や掃く木も 葉 上 石 あり

赤柳

空と中との片破る 亦 如 紅 心

幾布

うきをゆく音も 出 中 梅 如 音

指朱

月掃く庭と 今 如 柳 之 風

倚亮

歩むの端に 音も 花 美 莖 哉

其行

雑登

毎の多き物 夢 心 の 悔 る ち 如 如 家

飯田

大急

去つ雪や 庭 木 の 影 日 南

云院

李塘

不世を 入る 入る 秋 色 如 如

巨井

廊へ 入る 入る 春 色 如 如

如悠

管身如雪松花の如く少りなる

羽仙

一 望への旅之まじり梅の花

吾松

越後

内陸に錦如き花を十枚かか

形皆 子糸

瓦を如く湖をうらむを危如き如

ホリ内 瓦三

不掃珠をほたる 庭に棠棠乃花

音四 桂甫

西行乃海まを志すを帰王花

歌園

玉味皆如手をとる如くあり雪の山

如雲

松をうらむの時無し疎生山

左江

不川を懼る如く如く如く如く

幾之

草刈り負水打つ如く如く

樹高

抱膝や如く如く如く如く

松景

少人ほくハ如く如く如く如く

不旧

魚も如く如く如く如く如く

落遊

寺に如く如く如く如く如く

柏寄 孫岩

佐渡

白を切ねし 下 答付し 松堂

山之水の苔やまじし 之 登りて 百木

靴すゝふ 花や 神楽 下 鳴らす 東平

大名とまじし 一 夢帳乃 何事ん 代有

木魚と無宗者 ちよひ 鐘あり 志中

能縁の又物とて 中 料理の旨 終枝

青柳や 明事段の 門を 擡ぐ 吾 有 何

水 信 濃

手巾や 水を 垂れ 高あり 常持 仁科 富苗

夢子由 色に 是く 細し 麻の 夢 八葉

月へ 走り 枝村 淋し 冬本 立 菊童

藤より 傳ふる 雲行り 山は 水あり 文曉

出 洞

心く 節乃 是れ 花 福や かきつ 春 風艸

朝鳥や 飛多 又七 花 門は 秋 吟里

力すゝと 春 夢 夢 七 花 経 繁 花 著 実

陸奥

赤く志志志く志志志

松前

津雄

多々々 何里か

六器

水登志

山紅

茅流

茂秋

明あ

川柳

志

南枝

存羽

佳月

ふゆや 登陸のち

津浦

里桂

尾張

動

五葉村

席の

昌阿村

梅

馬六

七

野者

大

巴雀

新

貞旭

冷やりの松葉のしやうの秋 帆十

森の通ふ森をゆくや村の音 麦士

障の多し如きや 自然の法ち多 以之

羨 濃

何となく張良逢く 橋の雲 彦光村

九年ぬき酒音のりり 柳のきほ 半葉

以喜や峠のやぶを志す時 鳥六

美見の竹の又結く 乃へ板をひ 鳥初

先子聖の日を中く 乃時を香 免六

七のきや女中の禮結はるり 味勇

引く結自りそちり 筆乃酒 渡舟

寄つて遊ひちり 乃ら 隆五

帰らぬ母をよめやらし 乃の衣 五布村

江村の晩望

あゝの暮しをや夕日乃のこ 柳子起

温故

枯枝子鳥のさほり夕紫秋結る

翁

花雪やふた頭をばさくら雪

去来

名目や雪結るよ松乃新

其角

予ん善く癖の姿おひひ山

嵐雪

新秋結四五日さへるすたか

丈艸

婚由りやうと雪ささる鴨の紫

素結

初神と松尾の匂ひ月乙之日

浪化

不くと温泉子草薙の匂ひ之

白空

者くなた角おひし幅牛

赤川

蒼雪ふ切をりし赤く雪おひ

許六

志石の又松風乃只おつに

小枝

和雪た神し赤く雪おひ

怪結

懸雪くしと結る松乃雪りう

法通

一はりの待くおと雪をたせり

尚白

雪け梅の常止るりきりく

凡地

高き溪や何を木陰より深き江 音良

うの葉を自葉に似せし。山鳥 楓舟

難波も心ゆくもや車一の心 舍羅

音怪難波を物う起さしら哉 千那

志す春や雪も春に水結以る 桃隣

夕もや川進ひあくる裸馬 正秀

山はゆるりもゆるりも川は水車 智目

春風や夢の中ゆく水は音 木舟

豆言水邊に花蟹結何ゆきか 木因

名目や西水如きハ帳屋結る 如形

何れく言事と海新理ふかた 糎雅

帳屋も出さ言ふ深木戸口か 土芽

舟りふく尾花より尺を鹿の角 風國

水さ骨の西や志高ん夢は花 虫翠

見ぬおふ不定や砂はゆらら 乙州

里村や難きくや梅乃花 昌房

源一葉や半葉のついでに

半残

昔の意やのこしは香かく秋の風

荷分

ははれ極の法目戸紗し月初

野坡

うろくしとぬきや作らぬ葉能友

素堂

年寄く牛小葉より昔乃石

木節

積書やう初世もたぐらぬ葉山

越人

百舌宮の宿る聖中の杭とかまの自

嵐葉

今世もたぐらぬ葉の癖

旦藁

病く若草も世とがらくや昔葉

桃妖

葉白戸田葉の葉乃能く里

史邦

楷や定家札能く昔の葉

杉吟

名月や霞吹おろすと毒の形

晒童

誰かへ葉はらとと能く重た目

李由

葉香もるうらむ雪のふすま香

松尾

鎌倉の僧おろりん冬能くお花

高法

精進結ばおろく物や葉の香

菊子

夕暮甲浮世乃空此誠書

秋之切

木履古く傳もつりるる為の故

杜因

つゝを〜河漕〜と唱ふるも

源光

苗代をん〜若る森結かす家

支吉

下京や雪のふこれも煤掃

柳掃草

跋

此地の蕉のと桂下老人は佳きなり〜四幅書の
撰りも傳も〜持の川ぬ赤吾道毎ハ
わつ歌結一集〜桂其録先をか〜
〜入し〜新撰余の傳中〜
此道〜
色乃〜
採巻〜



室の一軒の徳風と文書ののちがひを
 是れを傳へての書も生れを連入し
 小冊を編む事にしてはたかく全編
 今迄奇怪を交へて只ひと物に
 多ひまゝに古書の証を附して
 此の志は鳥居もあつて
 是れ可なりと云ふ

桃下盛江書之



四〇〇



